

## P. Bec 氏と W.D. Paden 氏の発音について

### — P. Bec 氏の *Quan vei la laudeta mover*

アクセントの有無に関わりなく狭い [o] は13世紀から14世紀にかけて [u] と発音されるようになる。また、R. Lafont 氏 («Histoire interne de la langue 1. Grammaire», in *Lexikon der Romanistischen Linguistik, V, 2: Okzitanisch, Katalanisch*, p.4) によれば、鼻子音によって閉じられた音節にある [o] は他の場合よりも早くこの現象に見舞われる。さらには、アクセントがある位置よりもない位置の方が現象のあらわれは早かったともいう (たとえば *dolor* (< *dōlōrem*) は > [dulor] > [dulur] という変化をたどったらしい。— ただし、J. Ronjat, *Grammaire istorique des parlars provençaux modernes*, t. I, p.295 によれば、アクセント前、アクセント下に関わりなく同じ頃起きた変化らしい)。Bec 氏は、この o をおおむね [u] で発音している：

1 mover [mu-ver] (< [mo-ver])  
2 contra [kun-tra] (< [kon-tra])  
6 jauzion [dʒau̯-z̩i-un] (< [dʒau̯-z̩i-on])  
etc.

ただし、一貫しないところもある：

4 doussor [dou̯-sor] (> [du̯-sur])  
18 des l'or'en sai [des-lo-ren-saj̩] (> [des-lu-ren-saj̩])  
20 mout [mou̯t] (> [mu̯t])  
25 domnas [dom-nas] (> [dum-nas])  
etc.

vv.25, 34 *domna(s)*, vv.35, 36 *om* の o などは、ただ単に現代オック語 (ラングドシアン) の発音習慣から広い o で発音しているだけかもしれない。← L. Alibert, *Dict. occ.-fr. selon les parlars languedociens*, R. Barthes, *Lexique occ.-fr.* ともに見出し語の形は *dōna*, *òm*。L. Alibert, *Gramatica occitana segon los parlars lengadocians*, p.11 には次のような注記もある：«O seguit de nasala demòra obèrt dins mantun parlar allòc de se tampar en u (*ou fr.*), coma es de règla en lengadocian (montpelhierenc, roergat, gavaudanés, orlhagués e cevenòl): *font, pont, sona, dona (fòn, pòn, sòno, dònno)*. En carcinòl e en agenés òm a *fun, pun* al costat de *sòno, dònno*.» しかし、中世オック語のマニユエルでは — *datation* は一定しないが — 「鼻子音を従える広い o は狭音化して狭い o になる」「狭い o は更に狭音化して u になる」とされてもいるのである (たとえば Smith & Bergin, *An Old Provençal Primer*, pp.30-31)。v.24 *fon* (< *fōntem*), v.38 *pon* (< *pōntem*) を [fun], [pun] と Bec 氏が発音しているのは、そのことを踏まえた上でのことだと思ふのだが…。Guilhem de Cabestanh の *vida*

の朗読で Paden 氏は *domna* を [dumna], *hom* を [um] とはっきり発音している。

v.4 *doussor* (< *dūlciōrem*), v.20 *mout* (< *mūltum*) の場合は, u に母音化した l の前では狭い o のままで発音しているということだろう。 *doussor* の -or を [ur] と発音していないのは, 単なるうっかりミスだと思う。

v.18 *des l'or'en sai* (*Petite anthologie* での Bec 氏の表記は *deslor en sai* — 10/18 叢書のアンソロジーでは *deslòr en çai*) の *or'* は *ora* (< *hōra*) の -a がエリジョンを受けた形ではないだろうか。だとするなら, [ora] > [ura] と変化しているはずである。Bec 氏のテキストは 1880 年刊行の Bartsch の *Chrestomathie* (私は未見) から借用したものらしいが, 1904 年刊行の同書第 6 版では *des l'or'en sai* となっている。C. Appel のエディション (1915) と M. Lazar のエディション (1966) ではともに *de l'or'en sai* であり, 次の行の *que* とあわせて, それぞれ «*seit der Stunde, da...*», «*dès l'instant où...*» と訳している。

破擦音 [ts] [dz] は 12 世紀中に閉鎖音 (歯音) 要素を失って摩擦音 [s] [z] になるとされている。Bec 氏は [s] [z] で発音している :

12 *celeis* [se-lejs] (< [tse-lejs])  
37 *merce* [mer-se] (< [mer-tse])  
51 *plazer* [pla-zer] (< [pla-dzer])  
etc.

ただし語末の -tz は [ts] と聞こえる (v.37 *cazutz*, v.50 *dreitz*)。

v.39 *m'esdeve* を *s'esdeve* と読んでいるが, うっかりミスであろう。v.28 *descaptenrai* の発音 [des-kap-ten-draɪ] には「語中音添加」*épenhèse* (-nr- > -ndr-) が認められるが, うっかりミスというよりは, なかば「自然な」現象だろう。

#### — W.D. Paden 氏の *La vida de Guilhem de Cabestanh*

Bec 氏と同じように, Paden 氏は, アクセントのある狭い [o] は [u] で発音している。

(1) *Cataloigna* [ka-ta-lu-ɲa] (< [ka-ta-lo-ɲa])  
(3) *domna* [dum-na] (< [dom-na])  
(4) *amor* [a-mur] (< [a-mor])  
(5) *major* [ma-dʒur] (< [ma-dʒor])  
etc.

しかし、アクセントがない位置では、Bec 氏と異なり、狭い [o] のままで発音している。

(1) l'encontrada [len-kon-tra-da] (> [len-kun-tra-da]), Rossillon [ro-si-ʎun] (> [ru-si-ʎun]), confinava [kon-fi-na-va] (> [kun-fi-na-va]), Narbones [nar-bo-nes] (> [nar-bu-nes])

(2) cortesia [kor-te-zi-a] (> [kur-te-zi-a])

(3) moiller [mo-ʎer] (> [mu-ʎer])

etc.

ところが、一方で定冠詞 lo や前置詞 con のようなアクセントを帯びない単音節の後接語 (proclitique) を [lu], [kun] と発音しているのは、一貫性に欠ける印象を与える。(5) volia を [vu-li-a] と — たぶん「うっかり」— 発音している点についても同じことが言える。(3)(6) moiller とともに (7) muiller が見られるということは、アクセントがない位置でも狭い [o] が [u] にすでに移行していたことを伺わせていないだろうか。

far / faire の単純過去 3 人称単数形として fez とともに (7) fes が見られるということは、破擦音 [ts] が既にスー音 [s] に変化していることを伺わせるが、Paden 氏は -z を [ts] と発音している。

また、Paden 氏は (2)(3) molt を [mult] と (1 は軟口蓋化した状態で) 発音しているが、(10) autre の存在を考慮に入れば、歯音を従える l は既に母音化済みとみなせると思う (> [muʉt])。

等位接続詞は e と et が併用されているが、前者は子音で始まる語の前で、後者は母音で始まる語の前でというはっきりとした使い分けが行われている。ということは、<e> を音価ゼロと考えるべきではないということだろう。たとえば (3) et avia..., (7) et ausis を Paden 氏は [e-a-vi-a], [e-aʉ-sis] と発音しているが、[e-ta-vi-a], [e-taʉ-sis] と改めたい。

~~~~~

ここまで書いて、矛盾するような言い方になってしまうが、われわれ日本人が中世オック語のテキストを見ながら自分自身で音読する場合は、e, o の広狭に拘泥する必要はないと思う。また、綴り字の <o> を [ウ] あるいは [オ] と判断して発音するのも、決して容易なことではない。<o> は [オ], <e> は [エ] で構わないのではないだろうか (<u> は [ウ] か [ユ] か判断せざるを得ない)。ただ、テキストの音声的側面をないがしろにしない方がよいという意味でも、音読そのものは重要である。韻文の場合はとくに。(2001.9.3. - M. Okada)